

APORSプログラムの編成にあたって

木島 正明

APORS (Association of Asian-Pacific Operational Research Societies) の第3回国際会議が7月26日から29日までの4日間、福岡市の福岡リーセントホテルで開催された。プログラム委員会のワーキングメンバーの末席に名を連らねていた関係上、OR誌編集委員長からの仰せに従い、プログラム作成時の苦労話などを思い出すままに書くことにする。ただし、私は名を連らねているだけのメンバーで、ほとんどの仕事は他の先生方、特に伏見先生(東京大学)のご苦労によるものであり、大きな混乱もなく無事に国際会議を終えることができたのは、ひとえに他の先生方のご尽力によるものである。

各国のプログラム委員の呼びかけにより、外国からは6個、日本からは15個のオーガナイズドセッションがセットされた(表1)。一般講演の申込は約200件で、このうちアブストラクトが実際に送られてきたものは約190件(うち約100件が外国からの申込)であった。一般講演の内容については詳細するスペースがないので省略するが、オーガナイズドセッションの内容からは、その国の研究の動向が見て取れるような気がしておもしろい。さて、1つのセッションで平均3件の講演を行なうとして、95個のセッションが必要となった。会議では同時に8会場を並列させることになりプログラムの外枠が確定した。

プログラム編成は、まず一般講演のアブストラクトを読んで内容を分類する作業から始めた。アブストラクトだけから内容を判断するのは想像以上に難しい作業である。日本人の場合には、ふだんの交流を通して研究内容がある程度わかっているので、アブストラクトの内容の他にこれらの付加的な情報を使って分類できるが、外国人の場合には何を専門にしている人かなどの情報がほとんどないことがある。また、(少なくとも私には)見たこともない専門用語ばかり並んでいるアブストラクトも幾つかあり、世界におけるOR研究の幅の広さを身をもって体験したと同時に、アブストラクトだけによるプログラム編成の困難さを痛感した。

このような場合には、何人かのメンバーで議論することになったが、はたして思惑通りにうまく分類できたかどうかは定かではない。

ところで、内容の分類を細かくし過ぎると、おもしろいことに(というよりも困ったことに)、ほとんどのセッションが同国人だけとなってしまふ。これはある意味で、その国における研究の特徴や流行が反映された結果であろうと想像される。せっかくの国際会議ということで、人的交流を促進する面からも、あまり細かく分類しないでなるべく日本人と外国人が1つのセッションに混在する形をめざすことにした。しかし、実際には内容に片寄りがありすぎて、このような苦労

表1 オーガナイズドセッション

セッション名	オーガナイザー
Software Reliability	オーストラリア
Protean Systems	オーストラリア
Military OR	インド
Telecommunication	韓国
Production Planning	韓国
OR Practice in China	中国
Discrete-time Queues	宮沢 政清
Queueing Theory	高橋 幸雄
Stochastic Models	山崎 源治
Scheduling	黒田 充
Applications of Optimization	加藤 直樹
Marketing Science	木島 正明
Dynamic Programming	蔵野 正美
System Modeling	時永 祥三
Organizational Intelligence	松田 武彦
Super Projects	柳井 浩
Finance and Investment	福川 忠昭
Fuzzy Programming	坂和 正敏
Production Scheduling	木瀬 洋
Stochastic Systems	石井 博昭
Nonlinear Optimization	福島 雅夫

も実らずに、Spanning Tree, Combinatorial Optimization, Urban Planning などの一般講演のセッションでは日本人だけということになった。これらは日本の若手研究者の層の特に厚い分野であり、彼らの活発な研究発表の結果とも解釈できる。

さて、一般講演を内容で分類しセッションに分けた後は、いよいよ各セッションを枠に当てはめていく作業である。ここでは柳井先生（慶応大学）のお知恵が大変に役に立った。100近いセッションと総数300件のタグ（講演者とタイトルが書かれた細い紙で、申込時に書いて頂いたもの）を前に、われわれ若いメンバーがどうしたものかと思案に暮れていると、「若い頃に開発した方法を伝授する」と宣言されて、先生自らが大きな模造紙にセッションの枠を書き出した。まず枠を書いておいて、枠の中にタグをセッション毎に物理的に張り付けてゆくのである。こうすれば確かに、プログラムの進行の様子が目に見えるようになる。同一時刻に同じ人の講演が重なっていないか、同じようなセッションが重なっていないか、などの点の確認も容易である。何か不都合があるとそのタグを剥がして調整後また張り付ける。不都合がなくなるまでこれを繰り返すわけである。このために剥がせる糊という文明の利器が役に立った。

プログラム作成の手順としては、オーガナイズドセッションをバラバラにするわけにはいかないので、まずこれらを会場の大きさと全体のバランスを考えながら当てはめていった。次に、空いている枠に一般講演のセッションを内容と全体のバランス、それから日本人と外国人が適当に混ざっているか、などを考慮しながら当てはめていく。外国人の発表は比較的聴衆の集まると予想される時間帯におく、などの配慮もしたつもりである。また比較的近い内容、たとえば数理論計の講演はなるべく同じ会場で行なうようにした。ただし、全体的に見て分野の近い講演が多くて、たとえば同時に2つの会場で数理論計関連の講演があったのは仕方なかったであろう。会議の当日に、何人かの方から同じ時間に似たセッションがあるとお叱りをいただいたが、このことを差し引いても、たとえば、火曜日午後に Production Scheduling というセッションが D 会場と G 会場で行なわれていたり、Scheduling は2つのセッションがあったにもかかわらず

らず火曜日と金曜日に分断されていたりしている。この原稿を書くにあたってプログラムを見直してみると、これらの点はもう少しの工夫で克服できたという気がしており、反省の材料である。謹んでお詫びをしたい。

さて、いよいよ国際会議の始まりである。外国人は早めに来日するであろうから彼らの講演は早い時間にセットするというわれわれの目論見はみごとにはずされて、初日のセッションからいくつかの講演がキャンセルされた。しかも、その中の何人かは後日やってきて発表をやりたいと言う。また、都合でその日のうちに東京に行かなければならないという人や、事前登録なしにやって来て発表したいという者も現われた。基本的にはどんなわがままも聞くというポリシーだったので、これらの問題にも何とか対応したが、無理矢理に詰め込むことは時間の配分上無理がある。そこで、将来を予測して(?)ほぼキャンセルと思われる所へ移す、頼みやすい人に代わってもらう、などの戦法で対処することになった。幸い概ね要求はクリアーできこれらの人たちからは感謝されたわけであるが、このようなりスケジュールが司会者の方々ははじめ参加者の皆様の多大な迷惑となったのは否定のできない事実であろう。

ところで、全体でのキャンセルは約50件でキャンセル率は約17%であった。これが少ないかどうかの判定は取えてしないが、上述のように内容でセッションを分けたので、外国人だけから成るセッションが何件もあり、突然のキャンセルによりセッションそのものが潰れたり、わずか1件の講演しかできなかったセッションもあった。4件の講演が予定されていたセッションで予定の時間をはるかにオーバーするものもあり、結果として、同じ時間帯のセッションの長さに大きなばらつきが生じてしまったこともある。早く終わって明らかに手持ち無沙汰にしている人や、休む間もなく次のセッションへ駆け出す人の姿も見られた。キャンセルを予め考慮に入れたプログラム編成などできるはずもないが、何か巧い手はないものかと考えさせられた。

最後に、今回の国際会議のお手伝いを（少しではあるが）させていただき、貴重な体験を得ることができた。ここに感謝したい。専門や年代の違いを越えてご一緒させていただく機会はその多くはないと思う。